

ミスター「都市創造学部」=松岡拓公雄先生を贈る言葉

有 末 賢

亜細亜大学都市創造学部 教授

2023年3月末に70歳定年を迎えられる松岡学部長、本当にお疲れさまでした。都市創造学部一同は、先生への恩義と感謝を忘れません。2016年4月に亜細亜大学に5番目の学部として都市創造学部が開講され、初代学部長として松岡先生が就任されて以来7年間、一貫して都市創造学部の顔であられたのは松岡先生であった。学部の誰もが、ミスター「都市創造学部」=松岡拓公雄先生であることを疑いなく教育・研究に従事してきた。その松岡先生が学部を去られる時が来たわけで、感慨深いものがある。

私は、1953年生まれで、松岡先生とは1年後輩になる。松岡拓公雄というお名前は本名であるとお聞きした。私の父が「武夫」という名前、武士の「武」に夫、という大正7年生まれのあるふれた名前のつけ方と「拓公雄」というしゃれたネーミングが対照的であった。

父は、2020年12月に101歳で亡くなったが、やはり北海道生まれであった。開拓の「拓」に雄大な公（おやおやけ）という名前が北海道を連想させるのも何か不思議な縁を感じたものである。

松岡先生は、芸大の建築学科を卒業されている建築家である。日本にはいわゆる「一級建築士」という肩書は、どれくらいいるのか知らないが、多くは、工学部、理工学部の建築工学科出身の一級建築士が圧倒的に多いのだろう。ところが、松岡先生に伺った話だが、欧米では建築家はデッサンが基本で、芸術の領域であり、材料や強度、構造計算をする土木工学とは領域が別だと考えられているらしい。そういえば、フランスのル・コルビジェもスペインのアントニオ・ガウディも芸術家（アーティスト）であり、工学部出身の建築士とはイメージが異なる。松岡先生もいつもダンディであり、スタイルを気にしている芸術家である。

松岡先生は、ネクタイというものをしめない。これは、男性にとって、珍しい「おしゃれの象徴」であっ

て、ネクタイは、最も安易で型にはまった「おしゃれ」であるから、ネクタイをしなないと決めると、とたんにどうしていいかわからなくなってくる。ジャケットにワイシャツで良いか？ セーターのほうが良いか？ 襟元にアスコット・タイやマフラーが必要か？ など、いろいろと考えてしまう。

欧米の大学の先生方は、多くがネクタイを嫌っている。ネクタイは管理の象徴であるという見方から、学長、副学長などの役職者以外は、ほとんどがネクタイをしなない。日本の大学の先生方がなぜ多くネクタイを締めているのか、よく聞かれるくらいである。その点、松岡先生は欧米の大学教授と近いのかもしれない。

松岡先生は、都市創造学部の学生たちに「デザイン・マインド」を強調されていた。日本の建築家として世界的に最も有名な丹下健三氏に師事し、丹下建築設計事務所で働いてから、ご自身のアーキテクトファイズという設計事務所を立ち上げられている。また、滋賀県立大学環境科学部、環境建築デザイン学科で学生の指導にも長年、当たられてきた。琵琶湖の環境問題の専門家でもあった前知事：嘉田由紀子さんのもとで、滋賀県立大学の環境科学部が誕生して、松岡先生も環境に良い木造家屋の利点を生かした建築などに研究を広げられたのである。

私は都市社会学、地域社会学が専門であるが、建築学、住居学、都市計画学などの隣接領域にも関心を寄せてきた。よく言われるように、ハードとソフトという区分もあるが、松岡先生が最終講義の最後で言われていた「建築は都市の容器である」という言葉は重要であると思われる。確かに、ハードである建築、土木、都市計画は、都市を「容器」としてデザインしていく機能がある。しかし、都市が生きていくのは、周囲の自然環境や地球環境との調和であり、SDGsの実現である。また、都市という「容器」の中で生活していくのは、人間であり、家族であり、社会でもある。

都市創造学部は、建築やデザインを専門的に学ぶ学部ではないが、建築・デザインのマインドを知り、都市という「容器」で生活する社会人、生活人を学ぶ学部である。その意味で、都市社会学や地域社会学は、都市という「容器」と「中身」の関係を問うている。都市に住む人間たち、会社で働く人々、子どもから老人までの多くの消費者、そして都市化や郊外化、再開発やインフラの問題、都市と災害、デジタル化と都市、アジアと日本との関係など様々なことを大学で学ぶ。また、学生たちは2年生で海外留学を必修としている。現在はコロナ禍で中国を除く韓国、ベトナム、タイ、インドネシア、米国などの諸都市を経験することになる。このことも都市創造学部の大きな特徴である。東京、日本の地方都市、村落とアジア諸国の都市・地域社会との相違に気づくことも都市創造学部での大いなる学びである。

松岡先生は2018年1月に奥様を亡くされた。急なことで私たちもびっくりしたが、先生ご自身の衝撃と悲しみは尋常ではなかったと思われる。私自身ももう20年も前になるが、当時の妻を亡くすという死別の経験がある。私も松岡先生と同じで子どもがいなかったもので、突然、日常生活が一人になってしまい（犬は飼っていたが）途方に暮れる日々であった。松岡先生に対して、何もして差し上げられなかったが、学部教員たちの衝撃も大きかった。しかし、先生は淡々と学部長の仕事をごなされて、1年目、2年目、3年目と着実に癒しの日々を過ごされた。今年、2023年のお正月の年賀状で、昨年、再婚されたということを知って大変うれしくなった。私も死別から2年過ぎて今の妻と再婚した。松岡先生がこれからの人生をより充実したも

のになさることを確信している。「死別と再婚」という現象は、結構身近に起きている事実だが、家族社会学や家族心理学的にあまり研究対象となっていない。もちろん、死別した前の妻のことを忘れてしまうわけではないが、人は新たな人生も歩まなければならない。

松岡先生が手掛けられた札幌市の「モエレ沼公園」というのは、イサム・ノグチの設計で開始されている。彫刻家：イサム・ノグチは、1904年、日本人詩人の野口米次郎とアメリカ人作家のレオニー・ギルモアとの間に生まれた。1907年、ノグチが3歳の時に母レオニーと来日し、米次郎と同居するが、その後米次郎は武田まつ子と結婚し、母レオニーが一人で育てた。幼少期を日本で過ごし、1918年に単身渡米して、彫刻家を目指し、世界的な彫刻家になってから、戦後1969年、香川県牟礼町にアトリエを設けてからは日本を拠点に活躍した芸術家である。私は、慶應義塾大学・三田の第二研究棟に「ノグチ・ルーム」があったこともあって、イサム・ノグチにはずっと親しみを抱いていた。モエレ沼公園は、松岡先生たちのアーキテクトファイブがイサム・ノグチの基本設計を受け継いで、2005年にグランドオープンした。私もかつて、札幌市の公園・造園課の職員で慶應義塾大学通信教育課程で学んでいた卒論指導の学生さんに案内されて見学したことがあった。公園自体が一つの大きな「彫刻」という壮大な公園だったと記憶している。

私もアート、美術が大好きである。定年後は松岡先生とぜひアート談義をしたいと思っている。長年、本当にご苦勞様でした。お疲れを癒してください。ありがとうございました。